

【研究論文】

子どもが日記を書くことの意味

—小学校5年生の日記の分析から—

久保田 真帆

1. はじめに

本研究の目的は、子どもにとって、日記を書くとはどのような意味を持つ行為であるのかを明らかにすることである。

はじめに、ライフストーリー研究の手法を用いて、私の小学校5・6年次に起きた出来事や人間関係について、自身の日記を基に想起した。そこから自身の周りに起きた出来事や人間関係についての内省がどのように変容し、それに伴う日記の書き方にどのような変化があったかということを検証した。5年次では班替えをきっかけに親友のアンちゃんとの友情に変化があったが、それに関連して日記の内容や、登場する人物にも変化がみられた。なお、本研究で私の日記を分析・考察の対象としたのは以下の理由からである。

- ①自らの日記であることにより、プライバシーの上の制限にとらわれず、より詳細な分析・考察を行うことができるから。
- ②特定の人物が一定の期間に継続して書き記した日記であることにより、成長の過程を追っての分析に適しているから。
- ③先行研究において、自らの児童期の日記を分析・考察しているものは見られなかった。しかし、自らの児童期の体験をなぞらえながら日記の研究をし、実際の児童の姿と重ね合わせることによって、子どもに対する理解が深まると考えたから。

また、日記の中に登場する人物名についてはプライバシー保護のため、私以外の人物については仮名とした。漢字等の表記の誤りについては訂正せず、当時に書かれたまま掲載した。

続いて、日記をもとに想起したライフストーリーの裏側で、日記を読んでいた教師や、家庭での生活を知る母親が、どのように私を見守り、支え

てくれていたのかを考察した。そのなかで、アンちゃんと言った日の日記のコメントを、仲が良かった時期と疎遠になってしまった後で比較したことで、日記を書いた私の状況に合わせて、教師もコメントの書き方を変えていたことがわかった。

さらに、日記を基にした自身のライフストーリーをふまえて、学校教育のなかで書かれる日記の役割や、日記によってできる子どもと教師とのつながりについて先行研究と照らし合わせながら考察を行った。

本研究で、子どもにとって日記を書くということは、備忘のための記録よりも、日記を書くことで自分の生活を再認識して、考え方や見方を深めるという目的があるということがわかった。また、教師が読み手として存在する対読者意識についても追究した。対読者意識は、表現や表記への意識を高めることや、教師と気持ちを共有できることの安心感につながるということが明らかとなった。さらに、日記の特性である生活経験を書くことは、自分のことばで文章にしやすいという点において、「書くこと」の導入や論理的文章、文学的文章を書く学習の基礎としても適していることについて言及した。

2. 研究の実際

2. 1 私とアンちゃん～小学校5年生の日記より～

2. 1. 1 親友のアンちゃん

小学校5年生の私の日記の中には、あるひとりの友人の名前が頻繁に登場する。アンちゃんである。あの頃の私にとってアンちゃんはもっとも仲の良い友人だった。学校でも家に帰ってからもういつも一緒だった。日記にもアンちゃんと一緒に過ごした思い出がたくさん綴られている。しかし、そのアンちゃんがある時を境に、私の日記の中から姿を消していく。一体、何があったのだろう。私とアンちゃんの間に起きた出来事を日記を手がかりにして辿っていきたい。

4月7日（金）

今日、私の一番うれしかったことは、アンちゃんと同じはんになったこと、1年生から1回もなかったことがないのでうれしかったです。大変だったのは、給食の前にカナちゃんが泣いちゃったこと、は一大変だったー。1日

1 日が大切な時間だから、私は私なりにいい方を考え、楽しく、毎日がすぎてったらいいな—と思いました。(下線筆者)

マホさんは考え方が前向きでいいですね。先生もがんばろう。

アンちゃんは小学校 1 年次に同じクラスになったことをきっかけとして友達になった。私の通っていた小学校はクラス替えがなかったもので、これまでの 4 年間、ずっと同じクラスであった。ふたりは 2 年生になるころには学校ではもちろん、放課後もどちらかの家に行っては頻繁に遊ぶようになった。同じアイドルグループが好きで、休日には一緒にコンサートに行ったりすることもあった。母親と担任の連絡帳にも私たちふたりの様子がしばしば書かれており、低学年のころからふたりの仲の良さは周囲にもよく知られていた。

そのようなアンちゃんと 5 年目にして初めて同じ班になれたことの嬉しさは、格別のものだった。この日の母親の連絡帳にも「金曜日に班が決まった様で、一年生の時から一度もいっしょになれなかった、お友だちといっしょになれて、うれしかった様で、家に帰ってきてとても喜んでいました。」という一文が書かれている。

2. 1. 2 楽しかった 1 学期

(1) 一緒に遊んだ日々

6 月 19 日 (水)

今日は学校から帰ってきてアンちゃんと遊びました。すぐ私達はおもしろいビデオを見ました。先生だったらなんだかわかる？そして 2 階でいつもの遊びをしました。今日の内容は、買物当番とお風呂当番のことでした。そして…ディズニーシーにも行きました。ディズニーシーではみんなにじろじろ見られて少しいやでした。でもディズニーシーは(アンちゃんの家
の前の公園)とても混雑していました。公園でもディズニーシー気分になれてよかったです。(下線筆者)

ワクワクして楽しくなりますね。ていねいに書けています。

私とアンちゃんが遊んだある日の日記である。この日はアンちゃんの家

の前にあった、小さな公園をディズニーシーに見立てて遊んだ。ふたりで遊べば公園もディズニーシーに負けないくらいわくわくする場所になった。

(2) アンちゃんが消えた日

小学校に入学してから今まで仲が良かったアンちゃんが9月6日を境に私の日記の中から姿を消した。それと引き換えに、私の日記にはハルナちゃんという友達が多く登場するようになった。

(3) 大切な友達

次第に私の日記には「1人で生きられる人なんていないと考えると、どんなときも、みんなに感謝という気持ちになってきました。」(10月9日)のように、友達の大切さが書かれることが増えた。友達に認めてもらった嬉しさが書いてあるものもあり、一見するとクラスの中で友人と良好な関係を築いているように見える。しかし、10月10日の日記で、私は今まで悩んできたことを吐露することとなる。

10月10日(木)

今日はお話の会がありました。知らないお話だったし、よかったです。それと音楽はまあまあ大きな声でうたえてよかった。1学期や2学期の最初の方がもっと学校がたのしかったし、いやなことなんてなかった。でも今日ずーとわらってがまんしている自分に気付いた。家にかえっても学校にいてもずーとずーとわすれられない。人間たまには自分をおもいっきりだしてもいいよね。このことかいて少しはすっきりした。よかった。意味がわからないことかいてごめんなさい。でもすっきりした。べつにだれだれがいやで…とかじゃないですよ。なんかなにかがまんできなくて…でも学校では顔や言葉に出さないように気をつけよう。ごめんなさい。またそうだんすることとかあったらそのときはよろしくおねがいします。(下線筆者)

わかりました。いつでもいいよ。その時は、何とかして時間をつくるから。

この日記を見ると学校生活の中で悩みを抱えていることがうかがえる。この悩みの背景は、8月22日の日記まで遡ることとなる。

8月22日(木)

今日は、学校からかえってきて、アンちゃんと遊びました。私達の遊びは

とっても不思議です。まず女性自身を見ました。その後、お手紙こうかんをしました。私が女でアンちゃんが男でした。お手紙の内容はなんともいえないけど、私なりにすごくおもしろい！あと、人生ゲームをしました。私達はうらない人生ゲーム（仮）をつくりました。それとちょー楽しかったです。今日のはんを作るのが大変だったけど楽しかったです。(下線筆者)

本当、不思議ですね。いろんな遊び方をして楽しそうですね。班の方も決まってよかった！！

2学期に入って2日目の日記である。この日もアンちゃんと遊んでいたようだ。班替えもあったことも読み取ることができる。2学期ではアンちゃんとは違う班になった。

10月10日の今まで誰にも言えなかった気持ちを書き出した日記を見て先生はコメントの通り、私の話を聞き、その上でアンちゃんと話し合う時間を作ってくれた。そこで私は初めてアンちゃんの気持ちを知った。アンちゃんは「マホちゃんが、ハルナちゃんと同じ班になったから、もう私とは仲良くしてくれなくなるんじゃないか心配だった。」と話した。

2学期の班替えはクラスの中で班長を決めてから、班長になった人が集まって班員を順番に指名していくという方法で行われることになっていた。このとき、私たちはふたりのどちらかが班長になれば、また同じ班になれるかもしれないと考えて、私が班長になり、アンちゃんを指名する約束をした。しかし、その約束を守ることはできなかった。指名の1順目で、私よりも早く他の班長がアンちゃんを指名してしまったのだ。そこで私は、1学期と一緒に体育係をやっていたハルナちゃんを1順目に指名することにした。アンちゃんは以前に、私とハルナちゃんが話したり、遊んだりしているところを見て、仲間外れにされていると感じたことがあったようだった。私とハルナちゃんと同じ班になったことで、また仲間外れにされてしまうと思ったらしい。再び同じ思いをするのなら、その前に他の級友と仲良くしようということだった。

そのことを聞いて私も自分の気持ちを話した。ハルナちゃんと同じ班になっても、私が一番仲良くしたいのはアンちゃんであるということ。

私には他にも思うことがあった。それはアンちゃんが新たに仲良くし始

めたのが、授業中に悪口を書いた手紙を交換するなど、勝手な行動をしていた級友（数人）であるということである。正義感が強かった私はこのような行為が許せないということもあり、アンちゃんを「取られた」という絶望感と、「こんな人達と遊ぶなら私と遊んだほうがいいのに」という嫌悪感を抱いていた。しかし、このことを言ってしまったら、本当にアンちゃんに嫌われてしまうのではないかと思い、最後まで話すことができなかった。

1 学期では 71 日分あった日記のうち、16 日分にアンちゃんのことを書かれていた。しかし 2 学期の 88 日分の日記のうち、アンちゃんが書かれたものは 7 日分に減少していた。そのうち 6 日分は 9 月初旬までに書かれていたことから、9 月初旬以降に私とアンちゃんの友情に大きな変化があったと推測できる。このことから、きっかけとなった出来事は 8 月 22 日の班替えであったと考えられる。

2. 1. 3 5 年生 3 学期以降

(1)再び遊んだ日

2 月 12 日（水）

今日、学校から帰ってきてアン◎と遊びました。まずベリィがおきていたのでハウスからベリィを出してやりました。でも私達がおやつを食べたかったのでハウスに入れておやつを食べたり、ビデオを見ました。そしたらアン◎のお母さんが来てママとお茶をのみながら話していてなので 2 階で人生ゲームをやりました。すごく楽しかったです。また遊びたいです。

楽しそうね。仲良しっていいですね。

私とアンちゃんは 2 学期の班替え以降、すれ違いはあったものの「絶交」したわけではなかった。

アンちゃんは犬が好きだった。ずっと犬を飼いたがっていて、仲が良かったところに「もし犬を飼ったら、犬を連れてマホちゃんちに遊びに行く」と語っていた。ベリィとは 2 月に入ってから私の家で飼い始めた犬のことである。犬がいれば、アンちゃんも前みたいに遊びたいと思ってくれるかもしれない。友達のなかで、一番にベリィを見せてあげて、一緒に遊ぼうと考

えていた。

2月26日（水）

今日、家に帰って来てからアン◎と遊びました。家についたらまずベリィがゲージから出ていたのでベリィも一緒に遊びました。そしてベリィをつれて外に行きました。そしてその後、おやつを食べたり、伊東家でやっていたゲームをやってもりあがりました。その次は e-kara をひさしぶりにやりました。とても楽しかったです。

アンさんも、マホさんと遊んで楽しかったと書いてありましたよ。よかったね。

「ベリィと遊びたいから、遊びに行ってもいい？」この日はアンちゃんから、私に遊ぼうと声をかけてきた。嬉しかった。これでまたアンちゃんと仲良くなれるかもしれないと思った。しかし、これが3学期でアンちゃんのことが書かれた最後の日記となった。

（2）修学旅行

6年次では、修学旅行でアンちゃんと同じ見学班になることがあった。一緒にいても、アンちゃんのことには日記には全く書かれていなかった。一方で、5年次での海洋教室の日記には、1日様々な体験をしたのにもかかわらず、夜のバンガローでみんなが寝てしまったあとも、ふたりで UNO をやって遊んだことが書かれている。どちらも宿泊学習のことであるが、5年次の海洋教室の日記にはアンちゃんのことを書かれているのに対し、6年次の修学旅行でも一緒にいたはずなのに、一度も書かれていないことから、私たちは前のようにお互いに話したり遊んだりするような「大切な友達」となることができなかったのだろう。

班替えは日常のなかにある小さな出来事だ。しかし、その小さな出来事は、時としてその後の友情関係や学校生活に変化をもたらす分岐点となることがある。小学校5年生の私にとって班替えは、今まで仲が良かったアンちゃんとの友情関係を変える大きな出来事となった。また、9月6日以降、たびたび友人に優しくしてもらったことや、友人の大切さを書いているのは、本当はアンちゃんと一緒にいられないことが悲しくて、悔しくて

仕方がないのに、ほかの友人のことを日記に書くことでアンちゃんだけが友人じゃないと自分に言い聞かせていたのかもしれない。

2. 2 先生のコメント

私の日記を先生がどのように読み、どのようにコメントしてくれたのだろうか。一緒に遊んだことについて書かれた日記を、私とアンちゃんの仲が良かった時期（4月～9月初旬）と私とアンちゃんが久しぶりに一緒に遊んだ3学期の2月12日と2月26日の2日分の日記のコメントに注目した。

2人の仲が良かった時期（4月～9月初旬）のコメント

- それは大変でしたね。長い一日でしたね。「モー娘」の唄ですごい！！上手なんですね。（4月19日）
- とてもくわしく書けていて、マホさんのにこにこした顔や楽しそうな様子がわかるようです。ユニホーム買った人うらやましいね。サイン入りのボールもすごいね。大事にしてくださいね。ずーっと！！（6月15日）
- ワクワクして楽しくなりますね。ていねいに書けています。（6月19日）
- 本当、不思議ですね。いろんな遊び方をして楽しそうですね。班の方も決まってよかった！！（8月22日）
- おもしろかったのかな。録音は成功しましたか。（9月3日）
- おもしろいね。次から次に頭にストーリーが浮かんでくるのかな。（9月5日）

3学期に入ってからのコメント

- 楽しそうね。仲良しっていいですね。（2月12日）
- アンさんも、マホさんと遊んで楽しかったと書いてありましたよ。よかったね。（2月26日）

ふたりの仲が良かった時期に書かれた日記へのコメントは、遊びの内容や楽しさ自体に共感したものが多く、先生の視点も誰と一緒に遊んでいるのかではなく、日記の書き手である私に向けられて書いている。

一方で3学期に入ってからのコメントは、遊びの内容よりもアンちゃんと一緒に遊んだという行為自体について書いていることがわかる。特に2

月 26 日では、アンちゃんも私と一緒に遊んだことの日記を書いてきたとコメントにすることによって、私のアンちゃんと仲良くしたい気持ちを後押ししたり、見守ったりしていることを日記のコメントを通して示していると考えられる。2 月 26 日の先生のコメントによって、再び仲良くなれるかもしれないと希望を持つことができた。

2. 3 学校教育での日記の意義

2. 3. 1 日記とは

日記は、一個人が自分自身を読者とした文章であり、一義的には備忘のための記録である⁽¹⁾。しかし、学校教育のなかで子どもが書く日記の目的は備忘のためなのだろうか。本研究での日記の分析のなかで、5 年次の 1 学期の 4 月 30 日から 5 月 9 日の間、全ての日記に対して教師からのコメントが書かれず、花丸のみの期間があった。その期間の日記の平均文字数を見ると、5 年次 1 学期の 1 日分の平均文字数が 178 文字であるのに対して、その期間中の日記は平均 96 文字となっている。また 5 月 9 日の日記では 5 年次 1 学期での最少文字数である 54 文字であった。

このことから、私の日記は自分自身を読者とした備忘のための記録としてではなく、教師が読み手であるという認識（対読者意識）のもと書かれたものであると考えることができる。備忘のための日記であるならば、教師のコメントの有無に限らずに一定の分量の日記を書くと考えられる。このような差が生じる背景には、私が教師からのコメントを励みに日記を書いていたことや、書いた日記を教師に読んでもらいたいという気持ちがあったのではないか。

2. 3. 2 日記を書く目的

(1) 子ども自身の生活ために

私の日記のうち、9 月 27 日、10 月 8 日、10 月 9 日に注目する。この 3 日分の日記には、友人の大切さや友人への感謝の気持ちが書かれている。生活の中ではアンちゃんとの関係が上手くいかなくなり、悩んでいたのであろうこの時期に、アンちゃんと仲が良かったころには書かれることのなかった友人の大切さについて書かれるようになったのはなぜだろうか。土

居清（1952）は書くことは、漠然とした思考や経験を形のあるものに構成するものとして、日記で子ども自身に生活を記録させることで、生活に対する見方や考え方をつけさせることができると述べている⁽²⁾。

小学校5年生の私がアンちゃんと前のように話したり、遊んだりすることができなくなくなり、悩んでいたときにハルナちゃんたちが優しくしてくれたことや、他の友人に認めてもらえたことは、普段以上に嬉しいことであった。それを日記に書くことで、1日の自分の姿を再認識し、友人への感謝や友人の大切さを書きながら自尊感情を取り戻そうとしていたと考えられる。

それでも、アンちゃんとの関係から失ったものは大きく、10月10日の日記では、ついに教師に悩んでいることを打ち明けるような日記を書くことになる。そのなかの「このことかいて少しはすっきりした。よかった。意味がわからないことかいてごめんなさい。でもすっきりした。」という一文に注目した。今まで悩んでいたことを日記に書くことで、気持ちの整理が行えたことがわかる。気持ちの整理が行われる背景には、教師が聞いてくれているという対読者意識の存在もあるだろう。この日の日記に至るまで、対読者意識を持ちながら書いていた日記に対する教師のコメントを読んで、理解や共感をしてくれているということがわかっていたから、このような悩みを書いても受け止めてくれるだろうという気持ちがあったに違いない。

（2）教師が子どもと向き合うために

先に述べたように、学校教育の中で書かれる日記には対読者意識が存在する。対読者意識は多くの場合、教師に向けられるものである。

子どもにとっては対読者意識があることによって、表現の面では相手に伝わりやすいように工夫したりなどの良い点が挙げられるが、対読者意識は教師にとっても重要なものとなる。教師が日記を読むことの目的について大熊徹（1983）は、以下のように述べている⁽³⁾。

指導者が日記を「読む」のは、「検閲」のためではなく、児童の日々の生活を理解するためなのであり、指導者がそれに対して毎日評語を書き加えることによって児童に種々の影響を促すためなのである。

アンちゃんについて日記に書いた後、話し合いが行われたが、以前のよ

うな関係には戻れなかった。しかし、その後このことについて日記に書いたり、相談したりするということにはなかった。私の日記を見ると、1学期に遊んだときと、3学期に遊んだときの日記では、教師のコメントの仕方が異なることがわかる。このことから、学校での私の様子と、相談した後も引き続き私の日記の中にアンちゃんが存在がないことから、判断してコメントを書いていたと考えられる。そして、コメントを通して自分が私とアンちゃんのことを見守っている姿勢を見せている。

一方で、もし私が日記を書いておらず、教師が日記を読むことがなかったら、教師は私が悩んでいることも知らず、話し合いを行うような対応もできなかったかもしれない。

(3) 生活経験を書くこと

私は本研究の対象となった日記を「生活ノート」という名のもと書いてきた。学校教育の中での日記の目的を追究する際で、生活文ということばを目にすることがある。生活文とは、生活経験を再現的に書くことによって生活を見つめ、現実認識を深め、生き方を見いだせる文章であり⁽⁴⁾、倉澤栄吉のことばを借りると、「子どもの文は全部生活文であって、学校における文も生活における文も、生活文であることにはかわりない。」のである⁽⁵⁾。したがって日記も生活文であるといえる。生活経験を書くということは、生活を見つめる以外に学習においてはどのような特性を持っているのだろうか。滑川道夫(1952)は、子どもの発達の上で話すことよりも書くことの方がより高度な表現技術であるとして、より困難な文章表現をさせる場合は容易なものを土台にして発展させることが必要であり、その際に生活経験を書くことが適していると述べている⁽⁶⁾。

実際に、国語の学習を始めたばかりの小学校低学年では、「書くこと」においてどのような指導が行われるのか、平成20年度版の小学校学習指導要領国語で確認とすると、第1学年及び第2学年の目標(2)に「経験したことや、想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身につけさせるとともに、進んで書こうとする態度を育てる。」という記載がある⁽⁷⁾。生活経験を書くことは、自分のことばで文章にしやすく、導入期に適しているといえる。

(4) 考察

日記を書き、生活の再認識を行う際には、自分を取り囲む関係にも目を向けることになる。教師の書いたコメントを読むことで、自分が思ってもいなかった考えに触れたり、自分のことを見守り、支えてくれたりする人の存在にも気付く。日記を書くということは、主として自分と向き合うことのように感じるが、それだけに留まらず他者や自分の属する社会と向き合う役割を果たすといえる。

3. 今後の課題

本研究における今後の課題として、以下の2点を挙げる。

①文字表記への着目

本論文では触れることができなかったが、日記分析を行うなかで興味深い点として表記に関することが挙げられる。表記の変化や、間違いに着目して、その背景にはどのようなことがあるのかを探ることで、子どもの生活や学習への支援に役立てていきたい。

②子どもの姿を感じながら日記を読むこと

本論文において日記を書くことを意味あるものにする要素として対読者意識を挙げた。まずはひとりひとりが対読者意識を持って日記を書けるように、コメントを書いたり、全体への支援を行ったりしていく。教師である私に向けられた対読者意識を大切に、日記に関わっていきたい。

【注】

- (1) 石井庄司・飛田隆・山口正 (1984)『実践国語教育体系』(第四巻〈表現〉(ジャンル別文章の指導) 教育出版センター p.251
- (2) 土居清 (1952)「日記の指導について」(『実践国語』13 (146), 穂波出版, pp.3066-3069) p.3066
- (3) 大熊徹 (1983)「日記指導論—国語科教育における意義と課題—」(『東京学芸大学紀要』, 第2部門, 人文科学 34, 東京学芸大学, pp.227-241) p.239
- (4) 福岡教育大学国語科研究室 (1975)『認識力を育てる作文教育』明治図書出版 p.14
- (5) 倉澤栄吉 (1959)『作文の教師』(倉澤栄吉 (1988)『倉澤栄吉国語教育全集』5, 角川書店) p.53
- (6) 滑川道夫 (1952)「生活文は、なぜかかせなければならないか」(大内善一編『国語教育基本論文集成 第8巻／国語科表現教育論 I 作文教育論(1)』, 明治図書出版
- (7) 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領』東京書籍 p.18

(くぼた まほ 茅野市立米沢小学校)